

第十八話

将門癸向事繁盛意見事

『前太平記』上 卷第三 五十四頁から五十六頁より

やがて御厨三郎将頼は、最初の戦に敗れて、一族一生の儲けを失った気持ちで、

当家一期の利を失ひし心地して、

(将門への) 顔向け出来ないと思ったのだろうか、勤めに出ることをやめて自宅にこもる。将門が使者を立てて言い遣わしたことには、「そもそも今回は日本国を敵とするものとして向かい受けて、無事の是非を戦の勝ち負けにこだわっています

安否を合戦の勝負に懸けて候へば、

と、その雌雄は何度も決するはずでありますので、今回の合戦にこちら側に勝利が

其雌雄幾度も有るべきにて候へば、

今度の合戦に味方の利無かりし事、

なかったことは、全く将軍としての恥じではない。ただ敵の不意を討とうとするた

全く将の耻辱に非ず。

め、あらかじめ考えをめぐらさなかったこと、これは将門の思慮の浅さが致すところである。昔秦の穆公_(老)が、孟明視_(武)・西乞術_(参)・白乙丙_(肆)に命じて鄭の国を攻めさせる。戦は勝利をなくして帰る。その時に穆公が言うことには、『これは三人

の罪ではない。私が百里奚^(伍)・蹇叔^(陸)の進言を使わなくしてこの恥じに遭遇する』と言って、ついに三人の将の官職と俸禄を元に戻したのである。とりわけ、敵が勝機の乗るならば、近国の軍勢は重なって（→増えて）、いっそう戦は難儀なことになるだろうか。日不移さず出発させたいと思う状態で、急いで外出して、敵を押しつぶす策を尽くすべきである」と詳しく言い受けたところ、将頼はこのおかげで気持ちが晴れて、すぐに勤めに出たのだった。こうして将門は、当国の相馬の港に出陣し、多くの軍勢の分配をしたのだった。左将軍には御厨三郎将頼に、文屋好兼を従えて、その数は合わせて三千騎余り、軍を七つに分けたのだった。右将軍には大葦原四郎将平に、別当多治経明を従えて、その数は合わせて二千騎余り。武蔵権守興守の軍勢は、熟達している老将であるからといって、諸軍の命令を担当さ

物馴れたる老軍なればとて、

諸軍の下知を司らしめ、

せ、本陣に配置された。総大将平将門は中軸となる一族（の者である）下総守将

本陣にぞ置かれける。

為、伊豆守将武、並びに常陸介藤原玄茂、坂上近高、藤原玄明、その他にも千葉・印旛・南相馬・北相馬・豊田・香取・臼井・佐倉・小輪田・舟橋など（の者たち）を始めとして、従類合わせて百九十七人を、前後左右に包囲させ、国中の軍勢三千五百騎余り、三軍合わせて二万三千騎余り、鬨の声を三度あげさせて、常陸国へと出発する。

こうして常陸では、宇志久野の戦に勝って、多くの兵が士気を上げる所に、また将門で押し寄せると噂されたところに、一族郎従を呼び集め色々と相談されたが、今度もまた、道の難所に打って出て、砦で防ぐのがよいと決まった。繁盛は少し考え、進み出て申し上げられたことは、「皆様の意見、いかにも当然でございますが、退陣して考えるところ、今度は将門自らが軍を率いて、大勢で攻めてくるのを、味方の小勢で出陣して戦うことは相応しくない。おおよそ正面衝突の勝負は、

大略駆け合いの勝負は、

互角の人数の上（で行うこと）。計略を使って戦わないならば勝機は少ないだろ

牛角の勢の上。

う。たとえ難所に陣をとったとしても、味方の少ない軍勢が敵に気をのまれ、進退を取り乱して、集散は思い通りに行くはずがない。ただこの城を守って、二十回とも持ちこたえたならば、敵は気力がくじかれて、きっと怠慢の心が起こるだろう。そのところを見極めて、一気に敵を押しつぶす術は、いかようにもあるはずでございます。これは『根を深くして藪を固くす』の計_(漆)でございます」と、道理に

根を深うし藪を固ふするの計

かなっておっしゃったが、一族の運のつきどころであったのだろうか、「いやいや、人の少ない小城で大勢に囲まれ、十日ともたつならば、すぐに兵糧が尽きて、防御の術を失うだろう。たとえ敵が大軍であっても、皆国々から集まった軍勢、一人も物の役に立つものであるはずない。味方はわずか二千五百騎余り。まことに少

数といっても、皆金石のごとき郎従である。ともかく難所を塞いで、敵を一人も国へ入れないような計略が相応しく存じましょう」と、よくよく申し上げたところに、「それならば多分に従え」と言って、同月十二日の暮れ時から土浦を出発して、藤代川を目前にして陣を取ると、将門も兵を進め、川から西に陣を取る。

注釈

※壹・秦の穆公……紀元前7世紀の中国春秋時代の秦の王。

※貳・孟明視……百里奚の子。

※参・西乞術……秦の臣。蹇叔の子。

※肆・白乙丙……秦の臣。蹇叔の子。

※伍・百里奚……秦の政治家で、穆公を春秋五覇の一人とした。

※陸・蹇叔……秦の臣。百里奚の親友。

※漆・根を深うし藪を固ふするの計……『老子』59章。国家を守るには根本（=城）が大事ということ。

参考文献：訳注任継愈、訳者坂出祥伸・武田秀夫『老子訳注』東方書店 1994年

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitterやメール等でご連絡くださいm(__)m

公開：2016/2/28

改訂：2021/3
海熊童子